

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(V)

——「子は三界の首枷」考——

宮 川 充 司*

The Kumano-Kanjin Jikkai Mandala and Its Roots (V)

—Reexamination on the Figures “A Child is the Pillory in Three Worlds”—

Juji MIYAKAWA

熊野観心十界曼荼羅（熊野観心十界図）は、熊野比丘尼が室町時代後期から江戸時代中期にかけて持ち歩き、絵解きに使用したといわれてきた絵画史料である。この絵画史料を体系的に分類整理した小栗栖（2004a）は、その時点で所在確認されていた熊野観心十界曼荼羅42点を32点の定型本、6点の別本あるいは時代の下る模写本4点に分類した。32点の定型本を属性により形式分類し、甲乙丙の系統、I～IXの形式で分類した。この分類枠が現在のこの研究領域における基本的枠組みとなっている。甲系統I～IVが10点、乙系統V～VIII 21点あり、丙系統IXは正覚寺本ただ1点のみである。甲系統が古い素朴な表現様式を伝えるもので、甲系統から乙系統への図像的特徴による時代的变化があったのではないかと推定している。また、小栗栖（2004b）は、定型本の中でもっとも古い表現形式を残している興善寺本（甲系統I形式）を、17世紀中頃の制作と推定できる別本六道珍皇寺甲本の表現形態とを比較し、表現形態に共通項が多くほぼ同じ時期の制作と考えられ、したがって従来の通説とは異なり、現存の定型本熊野観心十界曼荼羅はいずれも江戸時代以前にさかのぼるのは困難ではないかという主張を行った。

定型本については、さらに新たに数点発見されたという報告がある。三重県の宝泉院本（瀧川，2007）、滋賀県の宝満寺本、岐阜県でも新たな2点、香川県・大阪府等で新たな定型本が発見されたというような報告もあり、現在のところ38点の定型本の所在が知られていることになるが、小栗栖（2004a）の分類枠を以外の新たな表現形態の定型本は報告されていない。根井・山本（2007）により、熊野比丘尼関係の絵画史料や文献的史料の集大成といってもよい「熊野比丘尼を絵解く」が刊行されたことも、この学際的研究領域の成熟を示すトピックスとなっている。

宮川（2005，2006，2007，2008）は、生涯発達心理学と文化心理学の視点から、熊野観心十界曼荼羅の人の一生のイメージである「老いの坂」部分を中心に、分析を行ってきた。この熊野観心十界曼荼羅は、定説であった中国の天台教学の流れに沿って制作され

* 教育学部子ども発達学科

てきた「観心十法界図」が時代ともに発展してきたという単純なルーツの考え方でなく、もっと複雑なルーツ、すなわち六道絵や地獄絵といった系譜の図像が取り入れられ、さながら集大成となっている側面を持っているのではないかという考えに至ってきている。

宮川（2007, 2008）は、定型本甲系統Ⅰ形式の興善寺本・日本民藝館本と、17世紀中頃の制作と推定されている別本六道珍皇寺甲本（小栗栖, 2004a, 2004b）の比較分析から、絵画の部分ごとに多様なルーツを持っていること、とりわけ謎の多い甲系統Ⅰ形式の産湯部分は、江戸初期（17～18世紀）にかけて版本等で流布した世俗画「産婆の図」と同じ構図を持っているのではないかという指摘をおこなった。

熊野観心十界曼荼羅の中でも、中国に起源のある「血の池地獄」、室町時代後期に誕生したと考えられている女の地獄「不産女（石女）地獄」、「両婦地獄」ともかわり、さらに謎の多い通称「子は三界の首枷」部分に焦点をあてて再検討を試みる。部分画像は、図1の兵庫県立歴史博物館本とその部分拡大図を見ていただきたい。古い時代の中国や韓国で用いられた刑罰用の木の板で作られた首枷である。2枚の板で首を挟んで、拘束する道具である。また、両手部分も板に挟まれて動かせることができなくなっている手枷首枷である場合が多い。

小栗栖（2004a）による定型本の分類と部分比較表から、この「子は三界の首枷」画像の表現上の変遷をまとめ直したものを、表1として示す。図1で一目瞭然のように、この画像部分は、初期から含まれていたのではなく、甲系統Ⅰ～Ⅲ形式までは含まれていない。甲系統では、甲系統Ⅳ形式で初出となる。この系統のものとして、観音寺本を図2に示す。

「子は三界の首枷」画像の出現とともに、甲系統Ⅰ～Ⅲ形式までのものと甲系統Ⅳ形式のもう1つの差異は閻魔王が描かれ、なおその問題の「子は三界の首枷」は閻魔王の右後ろに描かれている点に着目していただきたい。後に詳しく論ずるが、この2つの部分画像は、少なくとも甲系統Ⅳ形式においては、浄玻璃の鏡とともに閻魔王と一具のものとして描かれた可能性が高い。細部に注意していただきたいのが、この観音寺本は、首が板に挟まれていないので、首枷ではなく「手枷」として描かれていることに注意していただきたい。手枷である以上、「子は三界の首枷」として絵解きされていたとは考えにくい。この手枷としての描き方は甲系統Ⅳ形式の他の諸本に共通している。また、重要なのは、その後を追いかける赤い着物を着た幼児である。この幼児は、一体どのようなことを示す画像なのか。

蛇足ながら、赤い着物を着て髪を束ねている子どもは、古い習俗からいえば女兒と断ずることはできない。むしろ、数え歳5歳の着袴前（あるいはもっとアバウトに7歳より前）の幼児（男女不明）と解釈すべきであるのは、老いの坂の幼児部分の解釈と同じである。男児の死亡率が高かった時代に、わざと赤い着物を着せて女兒と思わせることで魔物から守ったとか、赤そのものが子どもの魔除けの色であるといった多様な含蓄があるだろう。したがって、この追いかける幼児を特に女兒に限定して考える必要はない。

しかし、乙系統になると描かれた位置的にも閻魔王とは独立の画像として描かれ、絵解かれた可能性が高い位置に移動している。さらに、この絵画史料の発展プロセス上のものとしてその位置づけについて議論のある、丙系統の本覚寺本は、閻魔王が描かれていないのに、「子は三界の首枷」部分のみが描かれる。これも、「子は三界の首枷」部分が閻魔王とは独立した部分として描かれていった可能性を示唆するものである。

表1 閻魔王・不産女地獄・子は三界の首枷の表現形態
(小栗栖, 2004aから抜粋)

系統	形式	閻魔王	不産女地獄	子は三界の首枷
甲	I		左上	
	II		左上	
	III		左上	
	IV	正面	右下	左上(手枷)
乙	V	右向き	右下	右下(首枷)
	VI	右向き	右下	右下(首枷)
	VII	右向き	左上	右下(首枷)
	VIII	右向き	左上	右下(首枷)
丙	IX		左上	右下(首枷)

「子は三界の首枷」という諺の起源

さて、この「子は三界の首枷」と呼ばれている部分名称は、黒田(1989)の命名によるものである。この部分は初め解釈が困難な部分であったが、「子は三界の首枷」という諺がちょうど同時代にあたる室町時代に発祥しているのではないかという考察からこの部分名称がつけられた。世阿弥作とも諸説のある謡曲「天鼓」にその言葉があるというような非常に独創的な解釈からこの部分名称が発想されていた訳である。もう1つ付け加えると、小栗栖(2004a, 2004b)以前、熊野観心十界曼荼羅は、室町時代後期から熊野比丘尼が絵解きに使用した絵画であるというのが定説であった。現在では、この絵画史料の定型本の現存例はすべて江戸初期から中期(17～18世紀)にかけての制作によるものではないかという考え方の方が強い状況にある。

謡曲は、室町時代語の宝庫といわれているそうであるが、1つ注意しなければならないのは謡曲の人気曲の中にある名文句が、当時使われていたことわざや慣用句を取り込んだものとは限らないことである。むしろ、長い時代に亘って繰り返し演じられた名文句が諺や慣用句になる場合の方が多いのではないかということである。そこで、まず「子は三界の首枷」という諺が、室町時代に生まれたものなかどうかという国語学領域の問題に少しふれてみよう。

小学館日本語大辞典第二版(2001年板)で、「子は三界の首枷」を検索してみると、「親は子を思う心に引かされて、一生自由を拘束される。子は浮き世のほだし。」とあり、用例として「幸若・鎌田」(室町末・近世物)、江戸期のものとして「俳諧・毛吹草」(1638)、「浄瑠璃・八百屋お七」(1731年頃)が示されている(第五巻, p. 142)。

同様に、三省堂の「時代別国語大辞典 室町時代編二」(1989年刊)を引いてみると、「親の子に対する情愛は断ち切れるものではないから、生きている限り親は子によって自由な行動を拘束されるものである、ということ。→親子は三界の首枷。」とあり、用例として「毛

吹草」,「毛利家本幸若＝鎌田」,「短編＝わかくさ下」と記されていた。

こんな話を、大学の同僚で能楽研究家の飯塚恵理人氏（梶山女学園大学文化情報学部教授）に話したら,「そういうのは謡曲にいくつかあります。天鼓だけでなく、一番古いのが観阿弥原作といわれている百万ではないか。」ということで、数日後にそれらの曲目の謡曲集からのコピーと,「もう1つあった。」というということで,「水無瀬」という喜多流のみに伝承されている小曲のコピーをいただいた。これらの室町時代と考えられる原典から該当部分を抜き出してまとめてみたのが、表2である。ざっと調べただけで、室町時代に限定してもこれだけの出典があるので、少なくとも室町時代後期から近世初頭にかけて、この謡があったという考え方は間違っていないようである。

表2 三界の首枷の出典

種別	題名	概要箇所の表現	備考
謡曲	百万	げにや世々ごとの、親子の道に纏はりて、親子の道に纏はりて、猶この闇を晴やらぬ 朧月の薄曇 僅かに住める世に、猶三界の首枷かや、牛の車の常久に、いづくをさして引かるらん、えいさらいさ。 西野（1988）「謡曲百番」から	観阿弥原作 世阿弥作 古称 嵯峨物狂 室町初期
	天鼓	地を走る獣、空を翔る翅まで、親子の哀れ知らざるや、況んや仏性、同体の人間 此生に此身浮かべずは、いつの時か生死の、海を渡り山を越て、彼岸に至るべき 親子は三界の首枷と 聞けば誠に老心、別れの涙の雨の袖、霈れぞ増さる草衣、身を恨みても其かひの、なき世に沈む罪科は、ただ命なれや明暮の、時の鼓のうつつ共、思われぬ身こそ恨みなれ。 西野（1988）「謡曲百番」から	作者不明 世阿弥周辺の作か 室町
	水無瀬	緑子は三界の、緑子は三界の、首かせに繋がれて、婆婆にも行かれず冥途にも、帰りがねて悲しやな。 野上（1935）「解注・謡曲全集」から	作者年代不明 喜多流のみに伝来
幸若	鎌田	親のおこす謀反をなとかはしらて有へきそ。たとひ縁こそつくるとも。二人の若か有なれはなとさいこをしらせぬそや。なゝの子はなすとも女に心ゆるすなと。申傳へて候。 妻子珍寶及王位。臨命終時不随者。けにおもへは仇なり。子は三界のくひかせとは今こそ思ひしられたれ。三界のくひかせと煩惱の縊にひかれつつ。不覚の死をするものかな。南無阿弥陀仏みたふつと。是を最後のことはにて。朝の露ときえにけり。 笹野（1974）「幸若舞曲集」から	室町末期～近世初頭 毛利家本 幸若舞曲集
お伽草紙	わかくさ	わかくさ、そひはてぬよのなかに、あたなる人の見えて、みとりこさへいてき、おもはしとおもへと、わかれしときのおもかけ、みにそひて、まきれやるかたもなし こは、三かいの、くひかせと、ほとけの、ときたまへるもことはりなり、よのうきことを、いきておもふも、つみふかし、ほたひのたねとは、なるへからす 横山・松本（1985）「室町時代物語大成」から	室町後期 慶應義塾大学図書館蔵本 三冊。わかくさ下巻

絵画史の流れの中での検証

さて、次に熊野観心十界曼荼羅の当該部分が、本当に「子は三界の首枷」の画像なのかという検討に移りたい。この疑問については、六道絵や十王図研究の専門家愛知教育大学の鷹巣 純先生にお尋ねしたら、あっさりと「(この絵画部分は、熊野観心十界曼荼羅で初めて登場したのではなく) 元々は宋元画の十王図に描かれていたもので、宋元画では墮胎された胎児が十王に自分の母親を訴えるものだった。その証拠に、宋元画では紙を筒状に丸めた訴状を持っていた。ところが、十王図が日本に採り入れられ、描かれるようになるこの訴状部分が失われていく。」解説されてしまった。

中野 (1992) は、この中国の十王図と日本で制作されていく十王図・十王六道絵について詳しく論じている。宋代から元時代初めにかけて、南宋の寧波に活動拠点があった陸信 中筆のものが、日本に多く将来されている。同じ時代にやはり同じ地域で活躍した金大受 筆のものも、日本に将来されていて、その後の日本の十王図に大きな影響を与えた。

こうした宋元画の十王図の中で、「墮胎された胎児の訴状」が明確に描かれているものの一つに、称名寺本十王図 (現存5幅) のうち「變成大王幅」がある。奈良国立博物館が2007年4月～5月に開催した特別展「神仏習合—かみとほとけが織りなす信仰と美」展の図録にそれを見ることができる (p. 136)。手枷・首枷をされて、地獄の獄卒に引き立てられる母親の後ろに、右手で母親の衣服の裾を握り、左手に訴状と考えられる筒状に丸めた紙をもっている赤子が描かれているのである。

次に、日本で描かれた六道絵・十王図の中で、この当該画像部分が描かれているものを拾ってみた。

表3 十王図・六道絵における引き立てられる手枷・首枷の母親と赤子 (墮胎児)

作品名称	赤子 (墮胎児) の仕草	付帯する十王	備考
聖衆來迎寺本六道絵 閻魔王序幅	右手に母親の裾をつかみ、左手に訴状をもつ	閻魔王	鎌倉時代 (13世紀) 15幅
永観堂禅林寺本十界図 地藏幅 (左幅)	両手で母親の裾をつかむ	五官王	鎌倉時代 (13世紀) 対幅
出光美術館本十王地獄図 右幅	両手で母親の裾をつかむ	五官王	南北朝時代 (14世紀) 対幅 前田家旧蔵本
二尊院本十王図 宋帝王幅	両手で母親の裾をつかむ	宋帝王	室町時代 (14～15世紀) 土佐派の祖藤原行光説あり 10幅
浄福寺本十王図 宋帝王幅	両手で母親の裾をつかむ	宋帝王	室町時代 (15世紀末) 土佐光信による二尊院本の模写 10幅
崇福寺本十王図 變成王幅	両手で母親の裾をつかむ	變成王	室町時代 10幅
大圓寺本十王図 變成王幅	両手で母親の裾をつかむ	變成王	室町時代 (15世紀初) 10幅 崇福寺本とはほぼ同じ図柄
長岳寺本六道十王図 第六福 (地獄極楽図)	両手で母親の裾をつかむ	變成王	安土桃山時代 (16世紀) 狩野山楽筆 9幅

まず、もっとも著名でその後の日本の六道絵・地獄絵に大きな影響を与えた国宝の「聖衆来迎寺本六道絵」15幅のうち「閻魔王庁幅」の下中央にこの画像部分が描かれている（加須屋，2000）。この絵画史料だけが、日本で制作された絵画の中で、獄卒に引き立てられる母親と訴状をもった赤子としての宋元画の意匠が、詳細に写し取られているものである。その部分の拡大写真は、泉・加須屋・山本（2007）「国宝六道絵」（p. 151）で見ることができる。この聖衆来迎寺本六道絵は、「往生要集絵」として江戸後期に模写本が作られていた。聖衆来迎寺所蔵文政六年模本（1823）、それより以前に模写されたと考えられる円立寺本六道絵、誓願寺本往生要集曼荼羅等の模写本が琵琶湖の周辺で制作されていた（小栗栖，2003，2005）が、その中には当該の訴状をもった赤子を含めて忠実に模写されているものが少なくないようである。また、この聖衆来迎寺本六道絵には明治29年に筆写された絵解き台本が残されており（林，1983）、近年復元口演されたものがDVDとして公表されている（林，2007）ものの、第一閻魔王界の台本に当該部分に関する直接的な記述は見当たらない。

次に、鎌倉時代から安土桃山時代までに描かれた十王図・六道十王図の中から、この引き立てられる母親と裸の赤子を描いているものの概要をざっと表3にまとめた。

これらは、よく知られた著名な絵画史料を、2つの展覧会の図録から目についたものを拾ってみた。1冊は2001年に富山県「立山博物館」の開催した「地獄遊覧—地獄草紙から立山曼荼羅まで—」展、もう1冊は同じ時期に四日市市立博物館が企画した「冥界の裁き閻魔さまと地獄の世界—東海に残る六道信仰の造形」展の図録である。

これらをみると、聖衆来迎寺本とその模写本以外、日本で描かれた十王図あるいは六道十王図では、裸の赤子の描き方は訴状を持たずに両手で母親の衣服の裾を掴んでいるという共通点がある。ただ、当該の図像が付帯する十王は、五官王、宋帝王、變成王といった幅があることに気づかれるのみである。参考までに、図録では赤子が訴状をもっているかどうかといった詳細が判定できない「永観堂禅林寺本十界図」「出光美術館本十王地獄図」については、富山県「立山博物館」・出光美術館からポジネガを借り受け、EPSONのイメージスキャナーを使用し2400dpiで取り込みデジタル画像化したもので判定するとともに、これらの作品原本を精査した経験を有する愛知教育大学の鷹巣純先生に鑑定意見を求めた。「永観堂禅林寺本十界図」そのものについては、鷹巣（1991）などの研究がある。二尊院本・浄福寺本十王図については、日本アート・センター（1998）などに詳しく考察されている。参考までに、「永観堂禅林寺本十界図」の「地蔵幅（左幅）」、「出光美術館本十王地獄図」の「右幅」と引き立てられる母親と墮胎された赤子部分の拡大写真を、それぞれ図3、図4に示す。

最大の謎は、これら鎌倉時代から安土桃山時代にかけて描かれた十王図あるいは六道十王図の多くは、日本に将来された宋元画の十王図を直接基盤にして描いていたり、あるいはそうして制作されたものを模写するといった手法で描かれていったが、墮胎された子ども（水子）による冥官への訴状が鎌倉時代にすでに失われていたことである。1つは、近世以前における日本における墮胎がそれ程普及していなかったということも背景にあった可能性がある。

安土桃山時代に登場した中条帯刀を祖とする中条流の医書、「中条流産科全書」が刊行されたのは、江戸時代初期寛文18年（1668）のことであった。その中に記載のある「古血下



図1 兵庫県立歴史博物館本（乙系統Ⅷ形式）と子は三界の首枷部分



図2 観音寺本（甲系統Ⅳ形式）と子は三界の首枷部分

画像提供 三重県生活部県史編さんグループ



図3 永観堂禅林寺本十界図 地藏幅（左幅）と引かれる母親部分
画像提供 富山県〔立山博物館〕



図4 出光美術館本十王地獄図 右幅と引かれる母親部分

画像提供 出光美術館

し」あるいは「子くさり薬」という水銀を成分として含む堕胎薬が広く使われるようになったのは、江戸時代になってからのことである（酒井，1982；千葉・大津，1983）。堕胎薬を含めた「子おろし」より，江戸時代を通じてもっと広く行われたのが「子返し」とあるいは「間引き」と呼ばれた子殺しによる人工統制の方法であった（千葉・大津，1983；太田，2007）。

熊野観心十界曼荼羅の「子は三界の首枷」部分の再解釈

「子は三界の首枷」という諺が成立していたのは，室町時代という黒田（1989）の指摘は正しいかもしれない。しかし，宋元画の十王図の流れから形成されてきた日本の十王図や六道十王図，あるいは六道絵の流れからみると，絵画史的な見方からはいささか疑問が出てくる。なぜならば，その当該部分は，十王図の中では「引き立てられる母親とつきまとう堕胎児」というような名称で呼ばれるべき含蓄とルーツをもっているからである。

熊野観心十界曼荼羅となると，甲系統Ⅳ形式では首枷ではなく，手枷をされた母親，裸の赤子（堕胎された水子）はもう少し年齢の高い着物を着た子どもに表現上変化しているが，これは亡くなった後も亡者である母親が現世に残した子どもから離れられないといった「子は三界の首枷」ではなく，「子おろし（堕胎）や子返し（間引き）の罪」，つまり「子殺しの罪」であったのではなかろうか。絵解きの世界のことであるので，「子おろしにせよ，子返しにせよ。この世で子どもを殺した罪は，あの世でも問われる。つまりは，子は三界の首枷。」というような落ちを，この画像部分の絵解きでつけたという可能性まで否定することはできないが，熊野観心十界曼荼羅の絵解きについて残されている史料からは，いずれとも決しがたいというのが正直なところであろう。

謝辞

本研究にあたり，兵庫県立歴史博物館の小栗栖健治先生，愛知教育大学の鷹巣純先生，椋山女学園大学文化情報学部の飯塚恵理人先生には，さまざまなご教示をいただいたことを記し感謝の意を表します。同様に，三重県生活部県史編さんグループ，出光美術館，総本山永観堂禅林寺，富山県〔立山博物館〕からは，熊野観心十界曼荼羅諸本の画像写真のポジネグをお貸しいただき，あるいは画像使用の許可をいただいた。記して感謝の意を表します。

引用文献

- 千葉徳爾・大津忠男 1883 間引きと水子 農山漁村文化協会
 林 雅彦 1983 六道繪相畧縁起 林 雅彦・徳田和夫（編） 絵解き台本集 伝承文学資料集，11. 三弥井書店 pp. 279-323.
 林 雅彦（監修・編） 柴山平和（口演） 2007 国宝六道絵絵解き―「往生要集」の世界― 絵解き台本 方丈堂
 泉 武夫・加須屋誠・山本聡美（編） 2007 国宝六道絵 中央公論美術出版
 加須屋 誠 2000 穢土を巡る一聖衆来迎寺『六道絵』 朝日百科 日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅 地獄と極楽―イメージとしての他界―，6，20-49. 朝日新聞社

- 黒田日出男 1989 熊野観心十界曼荼羅の宇宙 宮田登(編) 体系:仏教と日本人8 性と身分—覇者・敗者の聖性と悲運— 春秋社 pp. 207-272.
- 宮川充司 2005 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(I) —「おいのさか」と生涯発達観— 相山女学園大学研究論集(人文科学篇), 36, 45-55.
- 宮川充司 2006 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(II) —後藤家本再考— 相山女学園大学研究論集(人文科学篇), 37, 11-26.
- 宮川充司 2007 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(III) —興善寺本と日本民藝館本の比較— 相山女学園大学研究論集(人文科学篇), 38, 45-72.
- 宮川充司 2008 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(IV) —産屋の表現形態— 相山女学園大学研究論集(人文科学篇), 39, 115-125.
- 室町時代語辞典編修委員会 1989 時代別国語辞典 室町時代編二 三省堂
- 中野輝男 1992 閻魔・十王像 文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館(監修) 日本の美術6, 313.
- 奈良国立博物館 2007 神仏習合—かみとほとけが織りなす信仰と美—
- 根井浄・山本埴生 2007 熊野比丘尼を絵解く 法蔵館
- 日本アート・センター(編) 1998 土佐光信 新潮日本美術文庫2 新潮社
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 2001 日本国語大辞典第二版第五巻 小学館
- 西野春男(校注) 1998 謡曲百番 岩波書店
- 野上豊一郎 1935 解注・謡曲全集 第4巻 中央公論社 pp. 381-390.
- 小栗栖健治 2003 「往生要集絵」の諸本(一)—聖衆来迎寺本六道絵の模本— 塵界(兵庫県立歴史博物館紀要), 14, 31-126.
- 小栗栖健治 2004a 熊野観心十界曼荼羅の成立と展開 塵界(兵庫県立歴史博物館紀要), 15, 129-242.
- 小栗栖健治 2004b 「熊野観心十界曼荼羅」図像の成立過程をめぐって —滋賀県・興善寺本を中心に— 近江地方史研究, 36, 3-18.
- 小栗栖健治 2005 「往生要集絵」の諸本(二)—聖衆来迎寺本「六道絵」の模本— 塵界(兵庫県立歴史博物館紀要), 16, 41-80.
- 太田素子 2007 子宝と子返し—近世農村の家族生活と子育て— 藤原書店
- 酒井シヅ 1982 日本の医療史 東京書籍
- 笹野 堅(編) 1974 幸若舞曲集 臨川書店
- 鷹巣 純 1991 禅林寺本十界図の図像をめぐる小考察 美学美術史研究論集(名古屋大学文学部美学美術史研究室), 9, 87-104.
- 瀧川和也 2007 地方に残る熊野観心十界曼荼羅 —三重県の作例から— 絵解き研究, 20・21(合併号), 43-61.
- 富山県[立山博物館] 2001 地獄遊覧—地獄草紙から立山曼荼羅まで—
- 四日市市博物館 2001 冥界の裁き 閻魔様と地獄の世界—東海に残る六道信仰の造形—
- 横山 重・松本隆信(編) 1985 室町時代物語大成 第13 角川書店